

特別会員寄稿

出会い、交流の場とサークル活動



所沢市民大学がめざすものとして、①市民参加でつくる ②出会いの場、交流の場をつくる ③問題を発見し共に考える ④地域に学びを広げる、ということがあります。

前回の「広場No.101」に書いたのは「①市民参加でつくる」

ために、企画委員会を立ち上げた経過でした。

今回は「②出会いの場、交流の場をつくる」について書いてみます。

市民大学では、受講生がいくつかのグループに分かれ、講義のあとにグループでの話し合いがあります。初めは15分の話し合いでした。実はこの講義後の話し合いをめぐって企画委員会で活発に議論されました。初めの頃は、せっかく講師をお願いしているのだからじっくり講義を聞きたいとか、話し合うことなど何もないという批判的な意見が多かったのです。しかも実際に講義が終わると話し合いに参加しないで帰ってしまう受講者もいました。

しかし、不思議なことは、市民大学閉講後のアンケートをみると、話し合いの時間が短かったとか、話し合いが一番良かったという感想も少なからずあるのです。

社会教育は自己教育・相互教育といわれますが、市民大学で「学ぶ」というのは、講義を聴くだけではなく講義のほかに、つまりこの話し合いのなかに何か学ぶことがあるのではないかと思います。

『学びの記録』には、市民大学を通じて「学びの喜び」を知り「仲間との出会い」があったことを多くの人が書いています。

そこで企画委員会では、講義以外の「話し合う」機会を考えていきました。グループ活動を学習の場として捉えたのです。

まず、グループミーティングとして、講義の後の話し合いは30分にしました。そこでは、毎回、講義の感想が語られます。また、講義当日の運営をグループごとに分担してもらうことにすると、そのためにグループで話し合いが行われます。めんどくさいことだと思われそうですが、そういう過程がメンバー間で知り合う機会になります。

そして、企画委員会では、グループ独自で取り組

社会教育・生涯学習研究所所長 細山 俊男

む「自由企画」という課題を考えました。グループで都合のいい日に、都内の美術館や観劇、ハイキングなどを計画して行ってもらおうというものです。この取り組みはなかなか好評で、その後自主的に飲み会が企画されたり、市民大学閉講後もつながりが継続しているグループもあるようです。

グループ活動の真骨頂は何といっても2年目のグループワークではないでしょうか。

前回も書きましたが、もともと市民大学が1年制のときは、話し合いの時間しかありませんでした。第10期の企画委員会で、「講義を聴くだけでは学んだことにならない」という議論のなかで調査・研究を行う「グループワーク」が導入されたのです。初めは講義が10回、グループワークが5回でしたが、それでは足りなくて自主学習がグループごとに行われました。

グループワークは熱心に取り組まれ、せっかくなら発表会をしかも公開でやろうということになりました。わざわざ見に来る人もいないのではないかと心配もありましたが、市民大学が2年制になったときに、1年目の学習プログラムに組み入れることで1年目の受講者にとって2年目のオリエンテーションにもなりました。

グループワークは大きな成果をもたらしました。担当する講師には3～5回の指導をお願いしていましたが、講座によっては何回も足を運んでいただいた講師もいます。受講者の熱意が講師を動かすという相乗効果があったのです。

しかし、グループワークに問題がなかったわけではありません。受講者が自主的に学習テーマを設定するのに時間がかかります。また、熱心さが高じて活動についていけなくなる人もうまれます。

こうした課題は、運営委員会のなかで対応が検討され、次期の企画委員会に引き継がれていきました。

いろいろ課題は今もあると思いますが、こうして2年目のグループ活動を発展させる自主組織としての「ところざわ倶楽部」が生まれたわけです。

市民大学がめざす「出会いの場、交流の場」づくりは、このようなグループ活動を通じて、地域で共に学び、共に生きる仲間づくりにつながったと思います。